



Title	線的世界からモザイク的世界へ：『四つのゾア』と ブレイクの時間
Author(s)	渡部, 充
Citation	Osaka Literary Review. 1986, 25, p. 44-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25525
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

線的世界からモザイク的世界へ

——『四つのゾア』とブレイクの時間

渡 部 充

Blake の預言詩『四つのゾア』における時間のあり方は、その空間構造同様に多層的に入り組んでおり、難解を極めている。それは一つには我々が出来合いでなじみの時間概念を Blake にあてはめようとする為であるが、そもそも彼は近代科学によってもたらされた線的で均質的な時間に反抗した詩人であった。この小論では『四つのゾア』に示された Blake 独自の時間のヴィジョン及びそれが詩の構成、特異な技法との間に持つ密接な関係を見ていく。従来、例えば Frye のような研究者は、草稿のままに残された『四つのゾア』をしかるべき統一に達しなかった失敗作と見なし、¹⁾ 作品背後に Blake の統一された思想・象徴体系を想定し、それを恐るべき厳密さで再構成するのであるが、本論では『四つのゾア』の現存状態における混乱を、Blake のヴィジョンを最もよく示す不可避のものと考え、新たな角度からこの詩に接近したい。

I

壮大な宇宙史であると同時に、分裂・墮落した人間の内面探求でもあり、また同時代の科学・思想に対する激しい怒りの、さらには失敗挫折したフランス革命への失望の書でもある『四つのゾア』においては、従って、様々な時間表象が様々なレヴェルで錯綜し、さながら時間のポリフォニーとなって響きあっている。²⁾ ここでは、そうした時間表象の中でもとりわけ Blake 的な時間、言い換えるならば Blake 的永遠のヴィジョンを詩の中に見ていく。

自身が一つの宇宙=人である巨人 Albion の四つのゾア Zoa への分裂・墮落と、分裂した Zoa 達が彼ら同様に分裂・墮落してしまった時空で繰

り広げる争いの物語である『四つのゾア』においては、時間は、ちょうど詩が詩人によって創られる虚構的な産物であるのと同様に、Blakeの考える永遠者達 Eternalsによってこの堕落した世界を規定する為に創られた、つとめて虚構的なるものとして考えられている。時間の枠組はアприオリに与えられているのではなく、自由に伸び縮みさせうるものとして描かれている。

Then Eno a daughter of Beulah took a Moment of Time
And drew it out to Seven thousand years with much care
& affliction

And many tears & in Every year made windows into Eden
She also took an atom of space & opend its center
Into Infinitude & ornamented it with wondrous art

(I 9:9-13 E 304-5)³⁾

こうして第一夜の冒頭で定められた時空の枠は、第九夜のアポカリプスに至って時の支配者である Los の手によって崩される。

Los his vegetable hands
Outstretchd his right hand branching out in fibrous Strength
Siezd the Sun. His left hand like dark roots coverd the Moon
And tore them down cracking the heavens across from immense
to immense

Then fell the fires of Eternity with loud & shrill
Sound of Loud Trumpet thundering along from heaven to heaven
(IX 117:6-11 E 386)

この間、墮落以前に想定される unity は Zoa 達のあやふやで、しばしば誤れる記憶の中に牧歌的イメージをもって描かれる。それは常に既に失われた時、回想の中に痕跡を留めるにすぎない unity であり、詩は失われた unity を求め、嘆き悲しむ Zoa 達の声に満ち満ちている。彼らの lamentation こそ詩の基本トーンを定めているのだ。

Blake的な永遠はこうした Zoa 達の回想の中にのみ求められる他在的

で無時間的世界ではなく、堕落し創造された時間の中にあって、一瞬一瞬の生を更新し創造する時間、一言で言うならば“永遠の今 Eternal Now”と呼びうるものに求められよう。これは、堕落した継起的時間にあって、想像力 Los の働きを通して実現される時であり、この世界の時空枠を超える為には Los 自らその枠組の中へと墮落しなければならない。こうして墮落した以上は Los といえども数々の誤りを犯し、女性的分身 Enitharmon さらには Spectre of Urthona へと二重三重の分裂を重ねるのであるが、彼が理性の化身たる Urizen と Urizen の世界に姿を与えようとハンマーを振るう瞬間、時の創造主たる本来の姿を垣間見せるのである。

[Los] in his hand the thundering

Hammer of Urthona. forming under his heavy hand the hours
 The days & years. in chains of iron round the limbs of Urizen
 Linkd hour to hour & day to night & night to day & year to year
 In periods of pulsative furor. (IV 52:28-53:3 E335)

もちろんこうして創造された Los の時間も、彼が墮落した存在である以上、不充分であり、Urizen の未来に対する恐怖を引き起こす継起的な時間 “the links of fate” (I 53:28 E336) にとどまるものではあるが。

ここに不充分ながらその原イメージを示していた Blake 的永遠は、彼の次の作品『ミルトン』において、完全なイメージを与えられている。

Every time less than a pulsation of the artery
 Is equal in its period & value to Six Thousand Years.
 For in this Period the Poets Work is Done : and all the Great
 Events of Time start forth & are concieved in such a Period
 Within a Moment : a Pulsation of the Artery.

(Milton 28:62-29:3 E 127)

ここでは Los のハンマーの響きが、極めて個人的な心臓の鼓動と結びつけられている。これは時間と空間の、永遠と無限の、時間と無時間の結節点であり、⁴⁾ 過去・現在・未来に渡る継起的時間（クロノス）の全てが、そ

の一瞬の時（カイロス）に収斂し、永遠のヴィジョンを開示している。

For every Space larger than a red Globule of Mans blood
 Is visionary : and is created by the Hammer of Los
 And every Space smaller than a Globule of Mans blood. opens
 Into Eternity of which this vegetable Earth is but a shadow :
 The red Globule is the unwearied Sun by Los created
 To measure Time and Space to mortal Men. every morning.

(Milton 29:19-24 E 127)

『四つのゾア』における転回点とも言うべき第七夜における Los とその Spectre との合体の場面の後、こうした内面世界と外面世界の逆転現象が起って、永遠世界が Zoa 達の内なるヴィジョンに開かれる。それは第九夜における時空世界の全き崩壊への前奏曲ともなっていると考えられよう。

II

『四つのゾア』第九夜は、しかしながら、何ら論理的・物語的必然性もなく唐突に始まる。Blake は第八夜で物語の最下点、自然宗教による世界支配を描いた後で、そこからアポカリップスへとつなぐ鎖をなんら提供していない。現存草稿も第七夜から第八夜にかけて極めて錯綜しており、Blake 自身最終的な形を与え得ないまま放棄した。今日、多くの批評家達が扱いに頭を痛める問題部分となっている所以である。Bloom の述べるように、『四つのゾア』の構成は Blake の想像力を裏切っている。⁵⁾ 第八夜まであまりに包括的に同時代までの歴史を描いたが為に、全体として一種の決定論、“機械仕掛けのアポカリップス a machinery of apocalypse” になっている。

この機械仕掛けの主たる道具は、Blake がキリスト教より借りて来た種々なイメージであり、また永遠者達である。それらは物語において、極めて御都合主義的に導入されており、因果の支配しない世界において因果のパロディとして機能している。⁶⁾

キリスト教における時間表象は、言うまでもなく、明確に特定された始まりと中間と終わりを持つ直線的で一回限りの歴史である。これは全ての物語の母体ともいるべき物語であり、この一見混沌とした不調和の世界に、神の下での究極的な調和を持ち込もうとする“fictions of concord”である。⁷⁾ Blake は、この原物語に託して彼の“fictions of concord”を提示しようとしたと言えよう。数度にわたる訂正・加筆を通して『四つのゾア』はますますキリスト教的色彩を濃くしてゆくのである。第九夜のアポカリプスの場面では、彼の想像力が聖書にいかに多くを負うていたかが見てとれよう。

しかし、キリスト教的時間の重要性にもかかわらず、第九夜で我々が目にするのはキリスト教的終末論における最後の審判ではなく、むしろ永遠に回帰する原初の混沌と秩序の相互作用であり、あるいは Zoa 達による祭りの準備なのである。この点に関しては Gallant が Eliade を援用しつつ多くを語っている。⁸⁾

それでは第九夜は永遠回帰神話の数ある変奏の一つなのであろうか。事態はそう簡単ではない。想像力に対する脅威 (Deism) を自らの詩の中に描き込むことになった Blake にとって、キリスト教にせよ、回帰神話にせよ、いかなる外的な力も有効な解決策とはならなかったといえよう。彼に残されたのは、今この一瞬の確かさと、詩を産み出す力であった。第九夜における終末のヴィジョンはキリスト教的終末でもなければ、回帰神話における原初の時でもない。それは Grimes が論じるように “間に in between” ある時であって、“始まりに at the beginning” でも “終わりの後に after the end” でもない。⁹⁾

III

それでは、この始まり—中間—終わりといった直線的構成も、また unity への回帰といった円環的構成もとらない¹⁰⁾『四つのゾア』は、伝統に依拠しながらどの伝統にも属さなかった詩人の失敗作とみなすべきであろう

か。彼の時間のヴィジョンは『四つのゾア』において、何ら明確な姿をとっていないであろうか。最後に、この問題をBlakeがこの詩において示した技法の分析を通して論じていく。

『四つのゾア』の技法、語りの特徴に関しては多くの研究があるが、ここでは McNeil の分析に即して整理しておこう。¹¹⁾ 彼女によれば『四つのゾア』は、(1)いかなる論理的説明も欠いており、従って、およそコンテクストを持たない、(2) Zoa 達にあっては will と action の、内面と外面の区別がなされていない、(3)物語には直線的時間継起がなく、普通の意味での因果性がない、(4)現在分詞構文が多用されていて、一種の永続する“現在”を描き出している等の特徴を持つもので、それは詩の mimetic mode には属さず、むしろ pre-Homeric primitivism に向かうものである。

この文学史上類をみない特異な形式の詩は、あえて言うならばシュールレアリスムの映画に近いものであろう。そこにはカットとカットの間になんの脈絡もなく、全体は夢るように動いていく。我々は、“見よ Lo!”という叫びとともに次々と提示される最もありそうもないヴィジョンを受け入れなければならない。その上、我々はただ受動的に Blake 的映画を“見る”だけでなく、積極的にその生成に、いうならば映画監督として参加しなければならないであろう。Bloom が論じているように、¹²⁾ そこでは外化された（視覚化された）内的世界と、（二元論的に定位された）外的世界との間の途方もない混乱が生じていて、我々の認識論の変革を迫っているとも言えよう。

こうした Blake 的ヴィジョンは Los と Tharmas が世界の霸権をめぐって争う第四夜によく見られるが、特に第九夜はそうした映画的ヴィジョンの一大ベージェントとなっている。Blake は彼流の世界の終末を描写してみせる。

The tree of Mystery went up in folding flames
Blood issud out in mighty volumes pouring in whirlpools fierce
From out the flood gates of the Sky The Gates are burst down pour

The torrents black upon the Earth the blood pours down incessant
 Kings in their palaces lie drownd Shepherds their flocks their tents
 Roll down the mountains in black torrents Cities Villages
 High spires & Castles drownd in the black deluge Shoal on Shoal
 Float the dead carcases of Men & Beasts driven to & fro on waves
 Of foaming blood beneath the black incessant Sky till all
 Mysterys tyrants are cut off & not one left on Earth

(IX 119 : 4-13 E 388)

死者達は甦り、圧政に苦しめられた者たちは立って圧政者達を糾弾する。

They shew their wounds they accuse they sieze the oppressor
 howlings began
 On the golden palace Songs & joy on the desert the Cold babe
 Stands in the furious air he cries the children of six thousand years
 Who died in infancy rage furious a mighty multitude rage furious
 Naked & pale standing on the expecting air to be deliverd

(IX 123 : 5-9 E 392)

こうして、墮落した時空世界の終末を迎えたZoa達は、来たるべき再生に備えて“人間の種 the Seed of Men”を蒔き、収穫までの時を待つ。

Then Urizen sits down to rest & all his wearied Sons
 Take their repose on beds they drink they sing they view the flames
 Of Orc in joy they view the human harvest springing up
 A time they give to sweet repose till all the harvest is ripe

(IX 125 : 22-25 E 394)

その間、Tharmas とその女性的分身 Enion は影となり Vala の庭の夢のヴィジョンに戯れるのであるが、やがて収穫の時がくる。

Then Urizen sitting at his repose on beds in the bright South
 Cried Times are Ended he Exulted he arose in joy he exulted
 He pourd his light & all his Sons & daughters pourd their light

(IX 131 : 30-32 E 400)

これらの描写には現在分詞が多用されているばかりでなく、時の副詞“then”“now”等が頻繁にあらわれるが、このことはそれらヴィジョンが“今”“ここ”において常に繰り返される永遠の過程であることを示している。Wilkie と Johnson によれば、Blake は“時制の並列 juxtapositions of verb tenses”において、ヴィジョンの内なる永遠の今と、人を支配する堕落した時における今と、曖昧な記憶の内にとどめられた理想の過去とを並置しているのである。¹³⁾

18世紀の科学、思想、宗教に対して独自の神話的世界を構築することで闘いを挑んだ Blake は、それら思想を支配していたユークリッド空間的な線型性に対して、非線型的で奇妙なまでにねじ曲った世界をモザイク的¹⁴⁾に示そうとした。Kilgore はこの時期の Blake を論じて、“a crisis of disenchantment with narrative itself”を経験していたとするが、¹⁵⁾そもそも Blake の神話世界は直線的語りとは相容れない質をもつのであり、線的・継起的配置から立体的・同時的配置という不可能性へ向かおうとするものである。この方向性が最も先鋭的に現れたのが『四つのゾア』であり、結果として第七夜から第八夜に至る部分が完全に整理されないまま終ったといえよう。Blake の時間のヴィジョンは、まさにこの『四つのゾア』の全体としてのあり方に最もよく示されている。

想像力=創造力の象徴たるハンマーを手にして、一瞬のうちに全時間を創り出す Los は Blake にとって詩人の原イメージであり、我々は例えば第七夜の Los とその女性的分身 Enitharmon の姿に、独自の彩色版画製作に打ち込む Blake その人と妻 Catherine の姿を見てとれよう。

And first he drew a line upon the walls of shining heaven
 And Enitharmon tincturd it with beams of blushing love
 It remaind permanent a lovely form inspird divinely human
 Dividing into just proportions Los unwearied labourd
 The immortal lines upon the heavens till with sighs of love
 Sweet Enitharmon mild Entrancd breathd forth upon the wind

(VIIa 90 : 35-40 E 370-1)

Losがハンマーを振るう一瞬、これがBlake的永遠のヴィジョンであった。そして、このLosこそ、『四つのゾア』という途方もないヴィジョンの集成に打ち込む詩人の自画像に他ならない。『四つのゾア』は自らの生成について語る詩であり、一種のメタポエトリーとしての可能性をはらんでいるのだ。

一方においては詩の統一性に重きを置いていたBlakeは、伝統のうちに、とりわけ『四つのゾア』以降はキリスト教の伝統のうちに、その統一を保証するものを求めたのであるが、彼と伝統とのかかわりは、それを許さないものであった。彼は伝統的な永遠表象に多くを負っている訳であるが、それらのどの一つにも満足していた訳ではない。そうした道具立ては彼の時代、急速にその本来の更新力を失いつつあったといえよう。詩人に残されたのは、絶えず更新していく“いま”という自己の意識であり、この意識を核にして、彼は利用しうるあらゆる象徴、あらゆる伝統を、自己の美的産出の契機として配置していく。そうすることで彼は必然的に自己の作品を“a machinery of apocalypse”にしてしまったのである。

詩はやはり唐突に、次のような言葉で終っている。

Urthona rises from the ruinous walls
 In all his ancient strength to form the golden armour of science
 For intellectual War The war of swords departed now
 The dark Religions are departed & sweet Science reigns
 (IX 139 : 7-10 E 407)

差し迫る戦争が、“知の戦争 intellectual War”が宣言され、詩は終ったところで再び新たな始まりを告げる。これらの詩行は我々を再び『四つのゾア』の混沌とした世界に差し戻すのである。

世紀の転回点にあって、詩人が最も大きな精神的危機を迎えた40才代に、挫折した革命と高まる社会的不安の雰囲気の中で書かれた『四つのゾア』は、¹⁶⁾ Blakeの詩人としての歩みにとっての大きな転回点に当るものであった。そこには、Blake初期予言書群の諸象徴が渾然一体となって流れ込

み、より大きな統一を目指しつつ渦巻きながらも、まとまった一つの統一体としては完成されず、続く予言書群へと流れ出していったのである。この未完の状態故に、それは多くの問題を投げかけてきたのであるが、同時にまた未完状態にあることにおいて、それは Blake の神話世界の特質と目指す方向性とを示すのであり、詩人のヴィジョンのあり方を雄弁に語っているのである。我々は一見失敗ともとれるその状態に、後の完成され、彫版された『ミルトン』や『ジェルサレム』には見られない詩としての新たな可能性を見い出すのである。詩の最後で支配する Blake の“歓びしい知 Sweet Science”こそ、定められた時空の枠組という近代的知の虚構を超えて、¹⁷⁾ 直線的語りの支配から脱しようとする知のあり方に他ならない。

注

- 1) Northrop Frye, *Fearful Symmetry : A Study of William Blake* (Princeton : Princeton University Press, 1947, reprint 1974), p. 309.
- 2) 修士論文 “The Hammer of Los : William Blake's Vision of Time in *The Four Zoas*” (大阪大学, 1986) では、『四つのゾア』における時間を試みに四つ取りあげ、第 1 の時計の時間 clock time を Urizen とその空間 Ulro に、第 2 の円環的時間 cyclic time を Luvhah (Orc) と空間 Generation に、第 3 の牧歌的至福の瞬間 Pastoral Moment を Tharmas と空間 Beulah に、最後に創造的瞬間 Creative Moment を Urthona (Los) と空間 Eden に結びつけて論じた。
- 3) テクストは *The Complete Poetry and Prose of William Blake*, ed. David V. Erdman (Berkeley : University of California Press, 1982) に拠り、ローマ数字で該当する“夜”を、続いてプレートナンバーと行数を示し、最後に Erdman 版のページ数を頭文字 E で示した。
- 4) Kathleen Raine, *Blake and Tradition* (London : Routledge Kegan Paul, 1969), vol. II, p. 152. 参照。
- 5) Harold Bloom, *The Visionary Company : A Reading of English Romantic Poetry* (Ithaca : Cornell University Press, 1971), p. 94.
- 6) Helen McNeil, “The Formal Art of *The Four Zoas*” in *Blake's Visionary Forms Dramatic*, ed. David V. Erdman and John E. Grant (Princeton : Princeton University Press, 1970), p. 381. 参照。

- 7) Frank Kermode, *The Sense of an Ending : Studies in the Theory of Fiction* (New York : Oxford University Press, 1967), pp. 58-9.
- 8) Christine Gallant, *Blake and the Assimilation of Chaos* (Princeton : Princeton University Press, 1978), pp. 95-115.
- 9) Ronald Grimes, "Time and Space in Blake's Major Prophecies" in *Blake's Sublime Allegory*, ed. Stuart Curran and Joseph Anthony Wittreich, Jr. (Madison : University of Wisconsin Press, 1971), p. 63.
- 10) *ibid.*, p. 75.
- 11) McNeil 前掲論文 pp. 373-390.
- 12) Harold Bloom, "Visionary Cinema of Romantic Poetry" in *The Ringers in the Tower : Studies in Romantic Tradition* (Chicago : The University of Chicago Press, 1971), pp. 37-45.
- 13) Brian Wilkie & Mary Lynn Johnson, *Blake's Four Zoas : The Design of a Dream* (Massachusetts : Harvard University Press, 1978), p. 17.
- 14) 初め“パッチワーク的”なる語を用いていたが、論文執筆直後目にした Marshall McLuhan, *The Gutenberg Galaxy : The Making of Typographic Man* (Toronto : University of Toronto Press, 1962) よりこの語を借用した。McLuhan は本論と直接の関係はもたないが、関連性の非常に高い問題を扱って興味深いので、敢えてここに言及する次第である。
- 15) John Kilgore, "The Order of Nights VIIa and VIIb in Blake's *The Four Zoas*" in *Blake : An Illustrated Quarterly*, 46 Fall 1978, pp. 107-113.
- 16) David V. Erdman, *Blake : Prophet Against Empire* (1954, Reprint, Princeton : Princeton University Press, 1969), pp. 288. ff. 参照。
- 17) いうまでもないが、絶対的時空間という Blake があれ程までに敵視した Newton 力学的世界観は今日終わりを告げて、Einstein 以降は、Blake 的な flexible な時空観の方が、むしろ常識的な世界観となりつつある。